

## メソスケールシミュレーションによる 緩衝材の特性評価に関する研究

岡山大学学術研究院 環境生命科学学域  
木本和志

### 1 はじめに

本共同研究では、粘土含水系の組織構造形成シミュレーションを目的とした粗視化分子動力学法 (Coarse-Grained Molecular Dynamics: CG-MD) の開発に取り組んできた。CG-MD 法では、分子動力学法と同様に、粒子多体系の運動方程式を解くことで粘土分子の位置と変形を求める。ただし、対象とする粒子は粘土分子を構成する原子そのものではなく、粘土分子の単位構造を一つの粒子に粗視化して扱う。また、粘土層間の交換性陽イオンへ水和することによって保持される水分の量と位置を、モンテカルロ法を用いて決定する。これら分子の運動と水分の配置を交互に計算しながら、最終的には平衡状態における粘土と層間水の配置 (組織構造) を求める。

CG-MD 法で層間水配置を求める際のモンテカルロ計算を行うために、水分量に応じて変化する水和エネルギーを用いる。粘土の膨潤挙動は交換性陽イオンの種類によって大きく異なるため、このことは、現実の粘土をモデル化するためにはイオン種に応じた水和エネルギーを設定することが必要であることを意味する。一方、昨年度の研究では、シミュレーションモデルの膨潤状態が離散的に推移するように設計した水和エネルギーを用いていた。これは、仮想的な粘土を想定したものであるため、現実を粘土を想定した水和エネルギーの設定方法を考案することが課題として残されていた。また、昨年度までの研究では、化学ポテンシャルを指定した CG-MD シミュレーションを行っていた。化学ポテンシャルは、実験条件として直接指定できる量ではない。そのため、CG-MD シミュレーションと実験の対比が難しく、この点も解決すべき課題の一つとして残されていた。

以上を踏まえ、本年度は次の2つの課題に取り組む。

1. 実験で観測された膨潤挙動を踏まえた水和エネルギーモデルの開発
2. 相対湿度を指定した CG-MD シミュレーションの実現

水和エネルギーモデルの開発は、ベントナイト緩衝材の材料として重要となる Na 型モンモリロナイトを対象とする。また、膨潤挙動に関する実験は、その場 X 線回折試験により相対湿度と層間距離の関係がこれまでに詳しく調べられていることから、その結果を利用した水和エネルギーのモデル化を行う。相対湿度は、熱力学理論式を用いて化学ポテンシャルに変換することができるため、指定された相対湿度を化学ポテンシャルに換算して CG-MD 計算に与えれば、二番目の課題は解決することができる。ただしこのとき、水和エネルギーから与えられる化学ポテンシャルと、相対湿度から指定された化学ポテンシャルが、互いに矛盾するものであってはならない。本研究では、CG-MD 系と環境の湿度が平衡状態で互いに一致することを条件として水和エネルギーをモデル化する。ただしその

ためには、本文中で詳しく述べるように、X 線回折試験による膨潤観察結果だけでなく、水分量と層間距離の関係を与える必要がある。後者の関係は実験で得られないため、全原子 MD 計算で得られる関係を用いる。今年度は、以上の方法で作成した新しい水和エネルギーモデルを用い、相対湿度をした組織構造形成の CG-MD シミュレーションを試行する。

以下では、化学ポテンシャルと相対湿度の関係を示した後、CG-MD 系が有する自由エネルギーの一部として水和エネルギーを導入する。次に、CG-MD 法の自由エネルギーから与えられる化学ポテンシャルと環境の化学ポテンシャルの平衡条件を示す。この平衡条件を表す関係を、モンモリロナイトの粉末 X 線回折試験と全原子 MD 計算による膨潤曲線を用いて水和エネルギーについて解くことで、Na 型モンモリロナイトの水和エネルギーモデルを得る。このようにして求めた水和エネルギーモデルを用い、相対湿度を指定した CG-MD 計算を行う。CG-MD 計算は、6 つの異なる相対湿度で行い、湿度に応じた層間距離や組織構造の変化について調べ、Na 型モンモリロナイトの X 線回折試験結果と整合する膨潤挙動が CG-MD シミュレーションに現れることを示す。最後に、本年度の研究成果についてまとめと今後の課題を述べる。

## 2 Na 型モンモリロナイトの水和エネルギーモデル

### 2.1 水蒸気の化学ポテンシャル

粘土含水系が温度  $T$ 、相対湿度  $r_H$  の水蒸気に接しているとする。水蒸気は粘土含水系に対して水分浴の役割を果たし、その化学ポテンシャルを  $\mu_w$  とすれば、 $\mu_w$  と  $r_H$  の関係は次のように表される。

$$\mu_w = \mu_w^{sat} + k_B T \log \left\{ \frac{\phi(P_w)}{\phi(P_w^{sat})} r_H \right\} \quad (1)$$

ただし、 $k_B (= 1.380649 \times 10^{-23} [\text{J/K}])$  はボルツマン定数、 $P_w$  と  $P_w^{sat}$  はそれぞれ水分浴の蒸気圧と飽和蒸気圧 [Pa] を表す。また、 $\phi(P)$  は蒸気圧  $P$  におけるフガシティー係数を表し、 $\mu_w^{sat}$  は  $P = P_w^{sat}$  における水分浴の化学ポテンシャルを意味する。ここでは、簡単のためフガシティー係数を 1 にとり、式 (1) を

$$\mu_w = \mu_w^{sat} + k_B T \log(r_H) \quad (2)$$

として用いる。いま、水分浴  $k$  に接して平衡状態にある粘土含水系の化学ポテンシャルを  $\mu$  とすれば、両者の化学ポテンシャルは一致する。すなわち

$$\mu = \mu_w \quad (3)$$

が成り立つ。

### 2.2 粘土含水系の自由エネルギー

粘土含水系の自由エネルギーを  $G$  とすれば、系内の水分に関する化学ポテンシャルである  $\mu$  は、水分子数  $N$  の微分

$$\mu = \frac{\partial G}{\partial N} \quad (4)$$

で与えられる。ここで、CG-MD 法における自由エネルギーを次のように定義する。

$$G = \langle \Psi_{LJ} \rangle + G_{hyd} \quad (5)$$

ここで、 $\Psi_{LJ}$  は粗視化粒子間相互作用に関するポテンシャルエネルギーを、 $G_{hyd}$  は層間水の水和に関する自由エネルギーを表す。 $\Psi_{LJ}$  は CG-MD 法において既に与えられているものだから、自由エネルギー  $G$  を定義することと、水和に関する自由エネルギー  $G_{hyd}$  を定義することは同義である。ここでは、平衡状態において式 (3) が満足されるよう

$$\frac{\partial G}{\partial N} = \frac{\partial \langle \Psi_{LJ} \rangle}{\partial N} + \frac{\partial G_{hyd}}{\partial N} = \mu_w^{sat} + k_B T \log(r_H) \quad (6)$$

から  $G_{hyd}$  を定める。以下、 $G_{hyd}$  を水和エネルギーと呼ぶ。なお、 $\Psi_{LJ}$  は、非平衡状態においても定めることができる。式 (6) は平衡状態において成り立つ式だから、平衡状態における相互作用ポテンシャルであることを明示するために  $\Psi_{LJ}$  でなく  $\langle \Psi_{LJ} \rangle$  と表記している。非平衡状態を含め、CG-MD 系の相互作用ポテンシャルは、Lenard-Jones 対ポテンシャルを

$$U(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j; \sigma) = 4\varepsilon \left\{ \left( \frac{\sigma}{r_{ij}} \right)^{12} - \left( \frac{\sigma}{r_{ij}} \right)^6 \right\}, \quad (r_{ij} = |\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j|) \quad (7)$$

として、

$$\Psi_{LJ} = \sum_{i < j} U(\mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j; \sigma) \quad (8)$$

で与えられる。ただし、 $\mathbf{x}_i$  と  $\mathbf{x}_j$  は、それぞれ第  $i$  および第  $j$  番目の粗視化粒子の位置を表し、 $\varepsilon$  は

$$\varepsilon = 1.0 \times 10^{-19}, \quad [\text{Nm}] \quad (9)$$

である。また、パラメータ  $\sigma$  は、層間距離を制御する変数で、粗視化粒子に水和した水分量としての意味をもつ。平衡状態における相互作用ポテンシャルは、式 8 のアンサンブル平均

$$\langle \Psi_{LJ} \rangle = \frac{1}{T_d} \int_0^{T_d} \Psi_{LJ}(t) dt \quad (10)$$

で得られる。ただし、 $T_d$  は計算時間、 $t$  は時間変数を表し、 $\Psi(t)$  は時刻  $t$  におけるポテンシャルエネルギーの瞬間値を意味する。

$\Psi_{LJ} >$  や  $G_{hyd}$  は熱力学的なマクロ変数であるから、温度  $T$ 、圧力  $P$ 、水分子数  $N$  を独立変数として表すことができる。ここでは温度は一定であるとして、 $P$  と  $N$  を使い、

$$G(P, N) = \langle \Psi_{LJ} \rangle(P, N) + G_{hyd}(P, N) \quad (11)$$

と書く。系の体積  $V$  と化学ポテンシャル  $\mu$  は、自由エネルギー  $G$  の微分として次のように与えられる。

$$V = \left( \frac{\partial G}{\partial P} \right)_N = \left( \frac{\partial \langle \Psi_{LJ} \rangle}{\partial P} \right)_N + \left( \frac{\partial G_{hyd}}{\partial P} \right)_N \quad (12)$$

$$\mu = \left( \frac{\partial G}{\partial N} \right)_P = \left( \frac{\partial \langle \Psi_{LJ} \rangle}{\partial N} \right)_P + \left( \frac{\partial G_{hyd}}{\partial N} \right)_P \quad (13)$$

ここで、 $\langle \Psi_{LJ} \rangle$  は系の体積と圧力の関係を、 $G_{hyd}$  は水分と化学ポテンシャルの関係を定める自由エネルギー成分となるように、分割されていると仮定する。すなわち、

$$\left( \frac{\partial \langle \Psi_{LJ} \rangle}{\partial P} \right)_N = 0, \quad \Rightarrow \quad \langle \Psi_{LJ} \rangle(P, N) = \langle \Psi_{LJ} \rangle(P) \quad (14)$$

$$\left( \frac{\partial G_{hyd}}{\partial N} \right)_P = 0 \quad \Rightarrow \quad \langle G_{hyd} \rangle(P, N) = \langle G_{hyd} \rangle(N) \quad (15)$$

のような分割であることを要請する ( $\Psi_{LJ}$  は  $N$  に依存するが,  $\langle \Psi_{LJ} \rangle$  をある種の平衡状態について  $N$  に依存しないようにすることは可能である) . このとき, 式 (15) は

$$\mu = \left( \frac{\partial G_{hyd}}{\partial N} \right)_P = \frac{dG_{hyd}}{dN} \quad (16)$$

となり, 平衡条件 (3) は,

$$\frac{dG_{hyd}}{dN} = \mu_w^{sat} + k_B T \log(r_H) \quad (17)$$

となる . 従って, 式 (17) の両辺を水分子数  $N$  で積分することができれば, 水和エネルギー  $G_{hyd}$  が得られる . しかしながら, 左辺が  $N$  に関する式である一方, 右辺は相対湿度  $r_H$  を通じて  $N$  が変数となっているため,  $r_H$  と  $N$  の関係を与える必要がある .

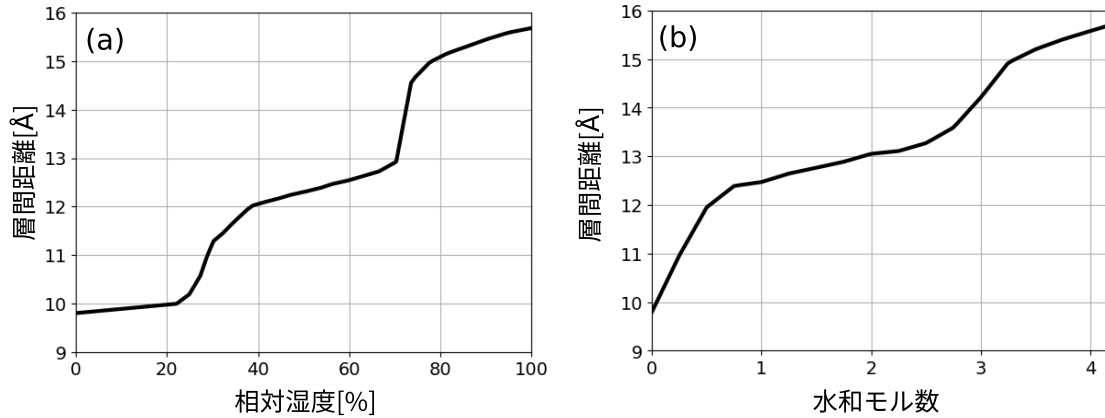


図 1: Na 型モンモリロナイトの膨潤挙動. (a) X 線回折試験で得られた相対湿度と層間距離の関係 (諸留, 河村 2009[1] から再現). (b) 全原子 MD 計算で得られた水和モル数と層間距離の関係 (森本ら 2023[4]).

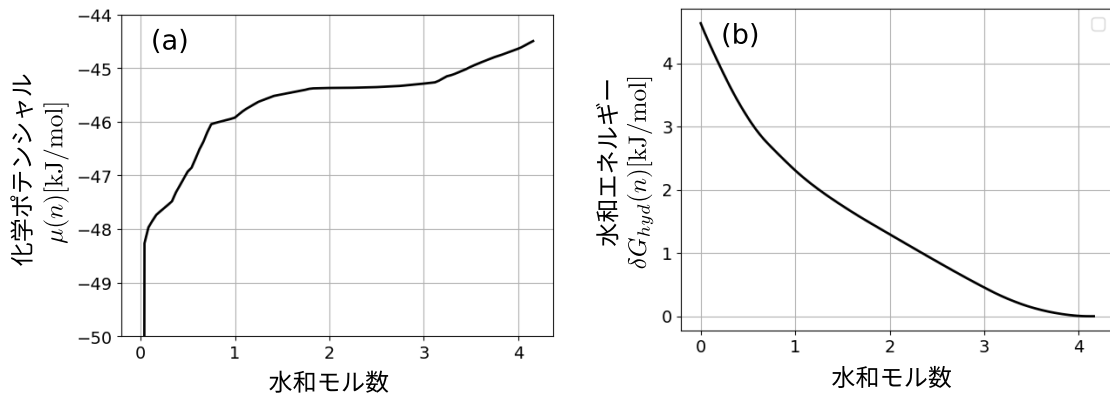


図 2: Na 型モンモリロナイトの膨潤データから作成した水和エネルギーモデルと水和モル数の関係. (a) 化学ポテンシャル  $\mu(n)$ , (b) 水和エネルギーの非線形成分  $\delta G_{hyd}(n)$ .

### 2.3 相対湿度と水分子数の関係

粘土の粉末 X 線回折試験 (X-Ray Diffraction) を行えば, 回折ピークから粘土層間の距離  $h$  が求まる . 諸留, 河村 (2009) は, 相対湿度と温度を制御した環境下でその場 X 線回

折試験を行い，温度一定条件での相対湿度と層間距離の関係

$$h = h(r_H), \quad (0 \leq r_H \leq 1) \quad (18)$$

を,  $r_H = 0$  から 1 の範囲で詳細に調べている．図 1 はその結果の一部である，Na 型モンモリロナイトに対する温度 50°C での結果を文献から復元したもので，横軸は相対湿度，縦軸は層間距離を示している．これを式 (18) として用いれば，環境の相対湿度と粘土含水系の層間距離を結びつけることができる．従って，層間距離  $h$  と粘土層間の水分子数  $N$  の関係が得られれば，二つの関係式を使って  $r_H$  と  $N$  の関係が与えられ，式 (17) の両辺を  $N$  あるいは  $r_H$  に変数を統一して書くことができる．この目的のために，全原子分子動力学法で計算によって得られた，層間距離と水和モル数  $n$  の関係：

$$h = h(n) \quad (19)$$

を用いる．図 1-(b) は，全原子 MD 計算から得られた式 (19) の関係で，実験で観測された，相対湿度 0 から 1 の間で取り得る層間距離の範囲でプロットしたものである．式 (19) と式 (18) の逆関数  $r_H = r_H(h)$  を合成すれば，

$$r_H = r_H(h(n)) \quad (20)$$

が得られ，この関係を計算してグラフ化すると図 2 にあるようになる．XRD 測定結果の  $h = h(r_H)$  と全原子 MD 計算結果の  $h = h(n)$  から得られた合成関数  $r_H = r_H(n)$ ．さらに，式 (20) を式 (17) に代入し，

$$N = nN_A, \quad (N_A = 6.023 \times 10^{23} : \text{アボガドロ数}) \quad (21)$$

であることを考慮すれば，式 (17) の変数を  $n$  に統一した次の関係が得られる．

$$\frac{dG_{hyd}}{dn} = \mu_w^{sat} N_A + k_B N_A T \log \{r_H(n)\} \quad (22)$$

ここで， $\mu_w^{sat} N_A$  は化学ポテンシャルを 1mol あたりの量として表したもので， $k_B N_A$  は気体定数  $R$  である．そこで，化学ポテンシャルを [J/mol] の単位で与えるものとして， $N_A$  を省略すれば，式 22 は

$$\frac{dG_{hyd}}{dn} = \mu_w^{sat} + RT \log (r_H(n)) \quad (23)$$

と表すことができる．これを定温条件で，湿度 1 を基準として積分すれば，自由エネルギーの変化

$$\Delta G_{hyd} = G_{hyd}(n) - G_{hyd}(n_{sat}) \quad (24)$$

が

$$\Delta G_{hyd} = \mu_{sat} \Delta n + RT \int_{n_{sat}}^n \log \{r_H(n)\} dn, \quad (0 \leq n \leq n_{sat}) \quad (25)$$

で計算できる．ただし， $n_{sat}$  は相対湿度  $r_H = 1$  のときに，粉末状の粘土がとる層間水量で， $\Delta n$  はその増分

$$\Delta n = n - n_{sat} \quad (26)$$

を意味する．また，粘土含水系の化学ポテンシャルは

$$\mu = \frac{dG}{dn} \simeq \frac{dG_{hyd}}{dn} = \mu_w^{sat} + RT \log \{r_H(n)\} \quad (27)$$

式 (27) より，層間水量による化学ポテンシャルの変化は右辺第二項で与えられ，この項が粘土の膨潤特性を表現している．また，対応する自由エネルギー変化の成分は，式 (25) の

右辺第二項の積分で与えられる非線形項で、右辺第 1 項の  $n$  に関する線形項は、粘土の膨潤特性とは関係しない．そこで、

$$\delta\mu = \mu - \mu_w^{sat} = RT \log \{r_H(n)\} dn \quad (28)$$

$$\delta G_{hyd} = RT \int_{n_{sat}}^n \log \{r_H(n)\} dn \quad (29)$$

として、これらの  $n$  に対する変化を描くと、下の図に示す結果が得られる．

### 3 数値解析例

本節では、Na 型モンモリロナイトに対する水和エネルギーを用いて行った CG-MD シミュレーションの結果を示す．CG-MD 解析では、温度、相対湿度、圧力を一定に保った状態で非平衡状態にある初期モデルから、モンモリロナイト含水系（以下、粘土含水系と呼ぶ）の CG-MD モデルで緩和計算を行う．これを 6 つの異なる相対湿度において行い、膨潤挙動の観点からみたときの、シミュレーション結果の妥当性について議論する．以下、初期モデルと計算手順を述べた後、シミュレーション結果を粘土分子配置のスナップショットと層間距離の頻度分布を示す．これらの結果をもとに、相対湿度に応じた膨潤状態の変化について述べる．

#### 3.1 初期モデルの作成

緩和計算を行うための初期モデルを図 3-(a) に示す．これは 2021 年度の共同研究報告書で述べた方法で作成した粘土含水系モデルの一つで、粗視化粒子数 3,194 で構成された、80 の粘土分子からなる．このモデルは以下の手順で作成されている．

はじめに、直線状の粘土分子を  $200 \times 200 [\text{nm}^2]$  の矩形領域に互いに重ならないように、位置と向きをランダムに配置する．この矩形領域を周期構造を構成する単位セルとして、乾燥密度が約  $1.6 \text{g}/\text{cm}^3$  となるまで  $1 [\text{ns}]$  かけて断熱圧縮する．その際、粒子系の運動方程式を時間積分するための時間ステップ幅は  $0.02 [\text{ps}]$ 、時間ステップ数は 5 万ステップとしており、時間積分に関するこの条件は以後の解析でも同じである．断熱圧縮過程では系の温度を制御していないため、圧縮によって系に加えられたエネルギーによって高温になり平衡状態にも無い．そこで、圧縮後のモデルを 300K まで 250ps をかけて冷却し、その後 750ps の間一定温度 (300K) で緩和計算を行う．なお、ここでいう緩和とは、温度や体積などの外的条件を一定にして、系を平衡状態に向けて推移させることを意味する．以上の計算では、各粗視化粒子において水分量を表すパラメータである粒子間相互作用ポテンシャルの特性距離  $\sigma$  を、二層膨潤状態に相当する  $\sigma = 1.5 [\text{nm}]$  に固定し、系内での水分移動も系外との水分の授受もないものとしている．最後に、無次元化された化学ポテンシャル  $\bar{\mu}$  を 0.5 に保ち、温度、体積一定のもと、水分分布を含めた緩和計算を  $1 [\text{ns}]$  間行う．このとき、 $\bar{\mu}$  の値は強い排水が起こるように設定されており、緩和計算後、大きな層外空隙をもつ組織構造が得られる．

図 3-(a) は以上の手続きによって得た粘土含水系モデルである．本年度の研究では、これを初期構造とし、Na 型モンモリロナイトの水和エネルギーモデルを用いて、相対湿度に応じてどのような組織構造へ移行するか調べる．初期構造を得るまでの計算では、昨年度の研究で検討を行った水和エネルギーモデルの一つである振動モデルを用いている．このモデルは仮想的な粘土の水和挙動を表現したものであるため、図 3-(a) の状態は、今回新たに作成した水和エネルギーモデルの下では平衡状態にない．そのため、相対湿度の設定値によらず、水分や分子配置には必ず何らかの変化が生じる．

### 3.2 相対湿度 50% に対する結果

図 3 の (b) と (c) は、相対湿度 50%、温度 300K、圧力 10MPa で 1ns 間、緩和計算を行ったときの粘土含水系の変化を示したものである。(b) は経過時間が 250ps の時点での分子配置を、(c) は 1ns の時点で緩和計算を終了した最終的な結果を示している。(a) と (b) の図から明らかなように、初期状態では非常に水分量が少ないため、緩和計算の初期の段階で速やかに吸水がおき、積層間隔が広がるとともに、図中 A-D のラベルで示した層外間隙の量が明らかに減少している。一方、(b) から (c) の間では、粘土分子の配置にあまり変化がなく安定した構造が形成されていることがうかがわれる。特に、間隙 A や間隙 B は収縮量が大きく最終的に A はほぼ消失していると言ってよい。これに対して、粘土分子を巻き込むことで形成された層外間隙である C と D は、吸水に伴う層間距離の拡張によって生じる収縮量が小さく、水分量変化に対し組織構造を維持する役割を果たしていると推察される。また、この計算では領域の体積は拘束されていないため、初期状態である (a) から (b)、(c) へ推移する過程で若干の体積収縮が認められる。このように、吸水による層間距離の拡張がある場合も、系全体としては収縮することもあり得る点は、マクロスコピックな観点での膨潤挙動について考える際に留意すべき点と考えられる。

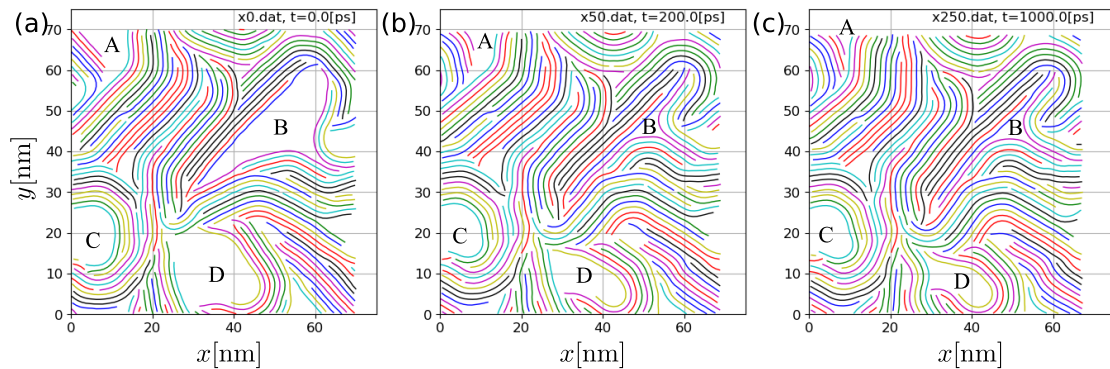


図 3: 相対湿度 50% での緩和にともなう粘土分子配置の変化。(a) は初期状態、(b) 緩和開始から 200ps の状態、(c) は 1ns 経過後の最終状態。A-D のラベルは粘土層外の主要な空隙を示す。

### 3.3 相対湿度による組織構造の違い

相対湿度 50% の場合に加えて、10,20,65,75 および 90% で同様に緩和計算を行った結果を図??に示す。相対湿度以外の計算条件は前項 50% の場合と同じである。

これらの結果のうち、相対湿度が最も低い (a)10% のケースでは、初期構造からあまり変化が見られず、層外間隙の形や大きさは当初の状態と同程度のままになっている。これは、初期構造が相対湿度が極めて低い場合に生じうるものであったことを意味する。ただし、系全体の体積はやや収縮しており、若干の排水が起きているものと予想される。この次に低い湿度の (b)20% では、全体の体積は (a) と同程度の収縮となっているが、層外間隙は収縮が大きいものもあり、相対湿度 50% によく似た分子配置となっている。ただし (c) のケースよりも初期状態からの系全体の収縮量は (b) の方が大きく、(b) から (c) の相対湿度範囲で排水から吸水が進行し始めると解釈できる。これに対して (d) の 65% の場合、全体としての体積変化はほぼ無視できる程度である一方、粘土層間の距離は (c) の場合より大きく、明らかな吸水に転じていることが分かる。この段階では粘土分子の巻き込みで残留した層外空隙も、かなりの程度圧縮が進んでいる。さらに相対湿度の高い (e) と (f) では、

系全体としても膨張する様子が見られ、このことは、層外間隙の体積収縮が (d) のケース以上には進行していないことと呼応している。

相対湿度と膨潤状態の関係をより詳しく調べるために、層間距離の変化をみる。図 5 はそのために、相対湿度毎に、層間距離の頻度分布を示したもので、横軸は層間距離を縦軸は頻度を示している。CG-MD 法では、水分量を粒子間相互作用を規定するレナード-ジョーンズポテンシャルの特性距離  $\sigma$  で表現している。 $\sigma$  は、概ね、粘土分子が積層したときの層間距離となるため、 $\sigma$  を層間距離とみなし、その頻度分布を描いたのが図 5 である。横軸の範囲は、10 から 16 Å としており、図 1-(a) から明らかなように、液体の水に系が接触していない場合この範囲外の層間距離となることはない。なお、無水状態である 0 膨潤では層間距離は約 10 Å、1 および 2 分子層膨潤ではそれぞれ 12.5 と 15.5 Å である。ただし、図 1-(a) から分かるように、天然のモンモリロナイトでは離散的な膨潤状態とそれに対応す層間距離を厳密に定義することは難しく、上に挙げた層間距離の値は代表値と考えることがより実情にあう。

図 5 から、全体的な傾向としては相対湿度の増加にともない、層間距離が大きくなることは明らかである。ただし、分布形状は相対湿度によって大きく異なり、相対湿度が低い程分布幅が広い傾向があること、湿度によっては、2 つあるいは 3 つのピークを持つ分布となることが特徴として挙げられる。また、一つ一つの分布に関して言えば以下のことが読み取れる。相対湿度が最も低い (a) の結果は、他の場合よりも分布幅が明らかに広く、層間距離は 10~12 Å の間に分布し、0 層と 1 層膨潤の中間的な状態となっている。この次に相対湿度の低い (b) の場合は、層間距離は 12 Å 周辺に集中し、ほぼ 1 層膨潤状態に移行している。図 1-(a) を見ると、粉末 X 線回折試験では 10~20% の相対湿度では 0 層膨潤となっているため、CG-MD 計算の方が、水分量が多い結果を与えている。これは、粘土分子の積層構造に起因する差で、粉末状態よりも多くの水分を持つ方が、系全体の自由エネルギーを下げ、構造を安定させるためと考えられる。逆に言えば、指定された初期構造から 0 層膨潤状態に移行させるためには、より大きなエネルギーを加えて計全体を強く圧縮するか、組織構造を破壊する必要があることを示唆している。これに対し、相対湿度 50% の結果 (c) では、分布幅が狭く層間距離がほぼ 12.5 Å と決まる。これは粉末 XRD 試験の結果とも一致し、系全体としても体積膨張を起こすことなく水分が取り込まれていることから、無理のない状態、維持されやすい組織構造になっていると考えられる。次に、(d) 65% と (e) 75% の結果を見ると、3 つあるいは 2 つピークをもつ多峰的な分布になっている。粉末 X 線試験結果では、これらの湿度は 1 層から 2 層膨潤への遷移領域にあたる。13 Å と 15.5 Å 付近のピークは、これら 2 つの膨潤状態にそれぞれ対応しており、Na 型モンモリロナイトの膨潤挙動がよく現れている。(d) では 13 Å 前後で 2 つの峰に分布が分かれている。層間距離が大きい側の小ピークは既に 2 層へ移行が開始しているが、十分な水分が行き渡らずに 1 層膨潤付近の層間距離にあるものと考えられ、図 1-(a) の膨潤曲線の折れ曲がりに対応している。これよりもやや湿度の高い (e) のケースでは、1 層から 2 層へ全て移行を開始しており、その結果として 13 Å 以下のピークは完全に消失している。最も高い湿度の (f) の場合は、2 層膨潤への移行が終了し、非常に鋭いピークを持つ分布が 15.5 Å の位置に現れ、粉末 X 線回折試験結果で観察される層間距離ともほとんど一致している。なお、(d) に見られる第 3 の小ピークを伴う遷移挙動が実際の固体粘土で観察も現れるのか、また組織構造との関連があるのかどうかは、固体粘土の組織構造を理解する上で興味深い問題である。以上に示した通り、今回の CG-MD 計算に用いた水和エネルギーモデルでは、Na 型モンモリロナイトの離散的な膨潤挙動に見られる特徴を再現できること、粉末 X 線回折試験では見られない組織構造に起因した挙動の双方が現れることが分かる。



## 4 まとめと今後の課題

本年度の研究では、粘土含水系がおかれた環境の相対湿度を指定した CG-MD 計算を行うための機能拡張を行った。その結果、温度や湿度、圧力、体積など、実験で制御することのできるマクロ変数を指定した CG-MD シミュレーションが可能となった。これは、X 線回折試験や膨潤試験時の実験条件に対応させた CG-MD シミュレーションが可能となったことを意味する。さらに、X 線回折試験と全原子分子動力学計算で得られた膨潤曲線を用いて水和エネルギーモデルを設定する方法を開発した。以上により、水和エネルギーを介して実際に観測される粘土の膨潤特性を CG-MD 計算に反映し、組織構造形成や吸排水に伴う膨潤/収縮のシミュレーションを行うための機能が整えられた。

ここでは、モンモリロナイトの粉末 X 線回折結果と、全原子分子動力学計算結果から Na 型モンモリロナイトの水和エネルギーモデルを作成し、その結果を水和モル数の関数として示した。また、Na 型モンモリロナイトの水和エネルギーを用い、温度、圧力、相対湿度を一定とする条件の下で形成される粘土含水系の組織構造を CG-MD 計算で求めた。このような計算を 10% ~ 90% の間の 6 つの異なる相対湿度に対して行い、相対湿度による組織構造や膨潤状況の違いを調べた。その結果、相対湿度の上昇に伴い吸水がおき、層間距離が広がることが確かめられた。ただし、層間距離の拡張は大部分が、粘土層外の空隙の縮小に吸収されるために、今回の計算条件では、系全体の体積変化は小さい結果となった。また、層間距離の分布を指定した相対湿度毎に調べた結果、相対湿度の上昇に伴い、1 層膨潤が 2 層膨潤へ推移し、2 つの膨潤状態が混在する場合はあるものの、中間的な膨潤状態はほとんど現れないことが分かった。さらに、相対湿度が 50% 以上の場合、層間距離は粉末 X 線回折試験で得られる結果と概ね一致し、Na 型モンモリロナイトの膨潤特性をよく表現することが分かった。一方、相対湿度の低い 10 および 20% の場合、粉末 X 線回折試験結果と異なり、0 層膨潤には移行せず、粘土が密な積層構造を作ることによる影響が現れる結果となった。このような現象が実際に生じるかどうかは知られておらず、低湿度側でのシミュレーション結果の妥当性については今後実験との比較で検討していく必要がある。その際には、例えば、シミュレーション結果から合成した X 線回折パターンを実測値と比較するなどの方法が考えられる。

上述のように、CG-MD 計算の結果から観測可能なマクロ量を算出して実測値と比較すれば、CG-MD 計算法や前提となるモデルの妥当性を検証できる。そのような検証を経て CG-MD 法の妥当性が確認できれば、X 線回折試験結果をはじめとする実験データ解釈に CG-MD シミュレーションを利用することも可能になる。現状、ナノメートルスケールの多孔質構造を、湿潤状態で直接観測する手法はなく、粘土含水系の組織構造には不明な点が多い。従って、信頼性のある組織構造モデル生成が可能なシミュレーション技術は有用と言え、本研究で開発を行っている CG-MD 法はそのような手法として有望と考えられる。ただし、十分な信頼性と汎用性を担保するためには、引き続き、以下のような課題に取り組む必要がある。

- Ca-型をはじめとする各種交換性陽イオンに対する水和エネルギーのモデル化
- 水和エネルギーとの独立性が保証される粒子間相互作用ポテンシャルの導出
- 水分拡散係数を求める方法を開発すること (弱い非平衡系への拡張)
- 3 層膨潤以上の膨潤状態を扱う水和エネルギーのモデル化と、その基礎となる X 線回折データの測定
- 3 次元モデルへの拡張

- モデルパラメータの最適化．例えば，運動方程式の時間ステップングに対する，水分移動に関するモンテカルロ計算の頻度を合理的な設定．
- 計算効率の改善と大規模な系での計算．並列化可能箇所の抽出，高速アルゴリズムの適用可能性を検討すること．モンテカルロ法の高速度化 (サンプリング法の改善)
- 粉末 XRD 回折試験で得られた膨潤曲線の CG-MD 法モデルによる正確な再現
- 実験データとの比較によるモデルおよびシミュレーション法の妥当性検証．特に，CG-MD 計算に基づく X 線回折パターンと測定結果の比較．X 線回折パターンから推定可能なメソスケール組織構造の有無を調べること．
- 吸水-排水，膨潤-収縮サイクルにともなう組織構造のヒステリシスについて調べる

## 参考文献

- [1] S. Morodome and K. Kawamura, "Swelling behavior of Na- and Ca-montmorillonite up to 150 °C by in situ X-Ray diffraction experiments", *Clays and Clay Minerals*, vol.57, pp.150-160, 2009.
- [2] H. Yamada, H. Nakazawa, H. Hashizume, S. Shimomura, and T. Watanabe, "Hydration behavior of Na-smectite crystals synthesized at high pressure and high temperature, *Clays and Clay Minerals*, vol.42, No.1, pp.77-80, 1994.
- [3] T. J. Tambach, P. G. Bolhuis, E. J.M. Hensen, and B. Smit, "Hysteresis in clay swelling induced by hydrogen bonding: Accurate prediction of swelling state, *Langmuir*, vol.22, pp.1223-1234, 2006.
- [4] 森本 逸紀，木本 和志，河村 雄行，"分子動力学法によるモンモリロナイト層間の水分子と陽イオンの分布解析"，*土木学会論文集 A2(応用力学)*, vol.78, 2022(掲載決定).

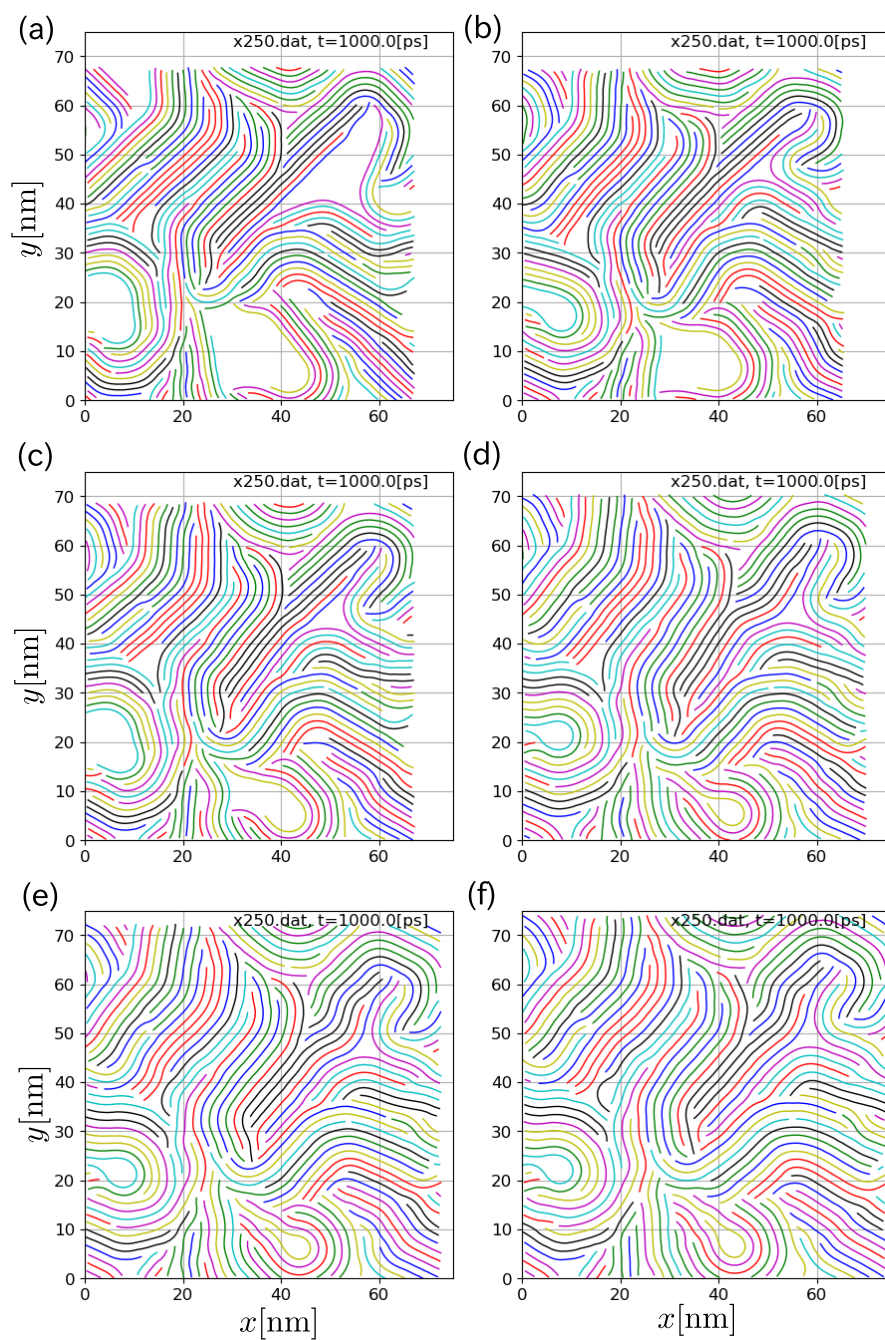


図 4: 6 つの異なる相対湿度において得られた粘土含水系の組織構造．相対湿度は (a) から (f) の順に 10,20,50,65,75 および 90%. 相対湿度 50% の結果は，図 3-(c) と同じものを再掲．

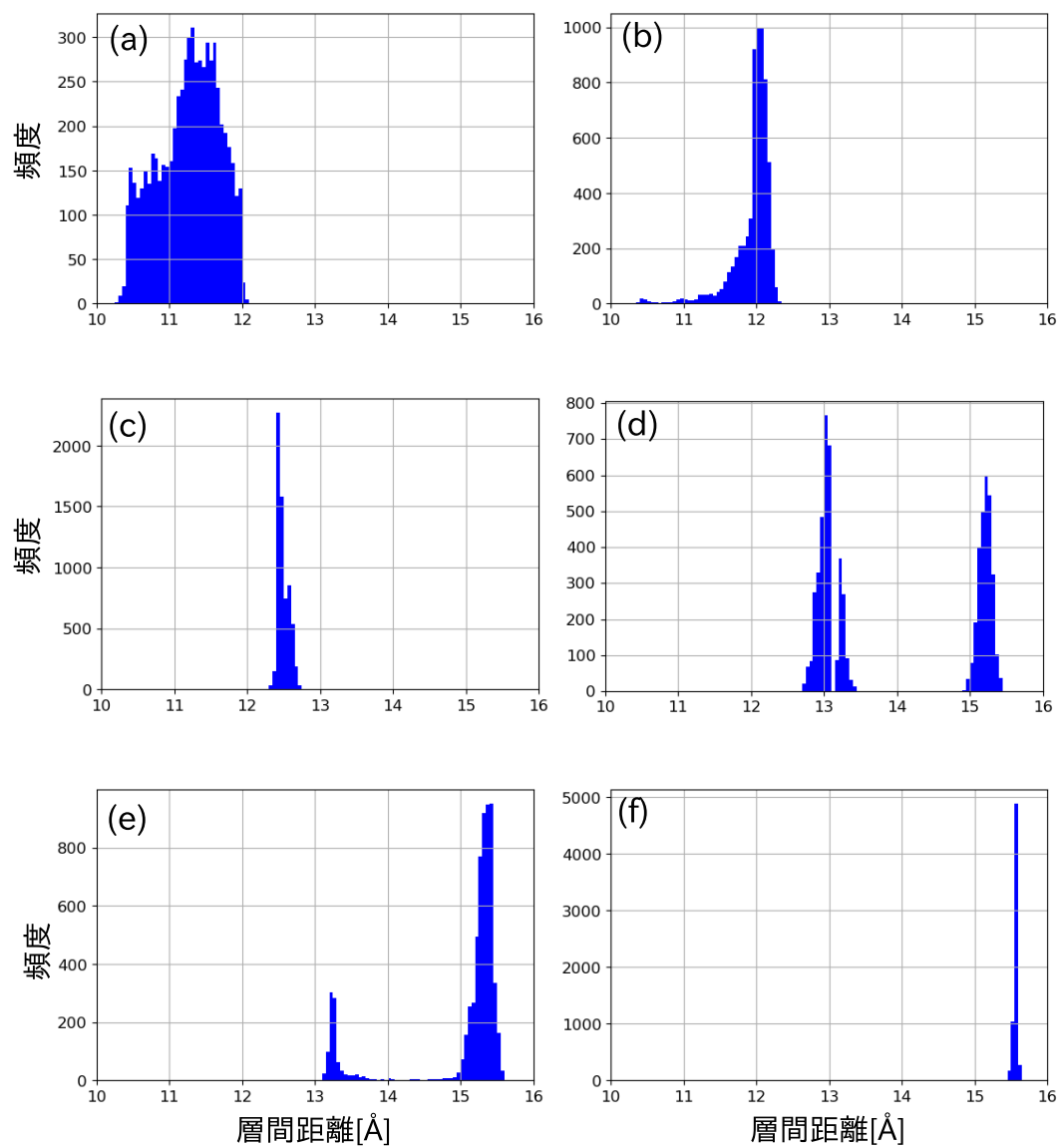


図 5: 6 つの異なる相対湿度における，層間距離の頻度分布．相対湿度は (a) から (f) の順に 10,20,50,65,75 および 90%.